公益社団法人　上伊那教育会

令和元年度　第71回 夏 期 講 習

◇　期　日：令和元年8月1日（木）、2日（金）　◇場所：上伊那教育会館　講堂

○テキスト
西田哲学選集　第一巻
『西田幾多郎による西田哲学入門』
第二部「善の研究」
第一編「純粋経験」第一章
第三編「善」第一章～四章･第九章

○講　師
京都工芸繊維大学大学院
教授　秋富 克哉　先生

１日目（８月１日）日程

開講式	9:00～ 9:20
討議１	9:25～11:25
討議2･3	12:25～16:45
「秋富先生と語る会」	17:30～

２日目（８月２日）日程

討議4･まとめ	9:20～11:20
講演会	13:00～14:40
閉講式	14:40～15:00

【開講式から】
林　武司　上伊那教育会長挨拶

皆さん、こんにちは。暑い日々が続いています。

今年も、この日のために、唐澤正吉先生のご指導をいただいて、今までに４回の読み合わせが行われ本日に至っております。そして、今日、明日と２日間、講師として京都工芸繊維大学大学院教授　秋富克哉先生をお招きし、唐澤先生とお二人のご指導をいただき、本年度の夏期講習会がいよいよ始まります。唐澤先生、秋富先生、よろしくお願いします。

この夏期講習会ですが、今年で７１回を数えます。この講習会は昭和２４年、飯島町の西岸寺で８月３日から３泊４日の日程で行われた夏期講習会に遡ります。「西岸寺講習」と呼ばれるものですが、郡下の青年男女教員が、企画から運営まで一切を担って行われていたということです。今年も正副運営委員長を、若い先生に担っていただいています。その講習会が、哲学の講習会へと特化され、本日を迎えているわけであります。

さて、私たちは、なぜ哲学を学ぶのでしょうか。なぜ、哲学にひたるのでしょうか。秋富先生からは「西田哲学には、私たちが生きていく上での基本、たとえば先生方であれば、日々学校で小中学生と触れ合いながら彼ら彼女らとともに自分を高めていく、そのようにして人間として生きていく、その最も大切なことに触れる契機が含まれています。」というメッセージをいただいています。唐澤先生は、「現場の教育活動そのものが哲学的問いである」とおっしゃっておられます。テキストを通して、自分の授業や学級、目の前の子どもたち、そして自分自身のあり様を見つめ直すこと、また、目の前の子どもの姿、学級の様子、授業を通してテキストに迫ること、この２日間、日ごろの教育実践とともに、研修の意味をもう一度自己に問い、再認識する機会としていただければと思っております。

実り多き２日間となりますことをご期待申し上げ、以上、開講の挨拶とさせていただきます。よろしくお願いします。

井出　峻汰　夏期講習運営委員長挨拶

本日は暑い中お集まりいただきありがとうございます。秋富先生、今年も遠路はるばるお越しいただきありがとうございます。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いします。唐澤先生、計４回の読み合わせ会に引き続きお世話になります。よろしくお願いします。

さて、この夏期講習会までに4回の読み合わせ会を通して西田哲学の「善の研究」について学んできました。哲学と聞くとどうしても難しい、というイメージがついて回りがちですが、先生方の日々のご経験とテキストとを照らし合わせて考えると、何かが見えてくる気がしました。こうして日々の実践や活動について話し合うことも、哲学的対話なのではないかと感じています。

本日はテキストの読み合わせからレポート発表、グループ討議を通し、先生方の日々の実践等語り合っていただければと思います。

そして、明日は秋富先生からご講演を賜ります。昨年もお聞きしたのですが、哲学とは何か、考えながら学ぶことのできる素晴らしいご講演で、今年も楽しみにしております。

この二日間、普段は触れる機会が少ないであろう哲学に親しむことを通して、少しでも何かつかみとることができれば、日々の生活に役立つのではないないかと考えています。

最後になりますが、ご参会の皆様が充実した夏期講習会を送ることを祈念致しまして、運営委員長の挨拶とさせていただきます。二日間よろしくお願いします。

討議する参加者の皆さん

【参加した先生方の感想】

■ 西田哲学はかなり難解であり、西田の真意を正しく理解することは難しいことですが、だからこそ先生方がいろいろな考えや見方でとらえて、考えを述べられていて、自分とは違うとらえ方・考え方を知ることができ、とても勉強になりました。

■ 子どもを毎日目の当たりにしている教師としての私にとって純粋経験とは何なのか、なぜそれが重要なのか、を立ち止まって考えるいい機会となりました。純粋経験によって自分の生き方・考え方が変わる。自分が更新される幸せを子どもとともに過ごしながら、もっと感じることができれば教員としてもっとやりがいを得られると思います。忙しい日々で純粋経験についてじっくり考える暇がないので、もっと多くの先生が西田哲学に触れられるといいと思いました。

■ はじめに林会長先生の挨拶の中で「なぜ哲学を学ぶのか」という問いをいただきました。一日を振り返って私が出した答えは「教師としてのあり方を考えるため」です。一つ目は教師としての自分自身の枠・幅・軸についてです。「なぜこう指導するのか」を常に意識し、私の中では子どもたちの未来の幸せ、笑顔のためという目的はあるのですが、より子どもたちの意志（意思の自由）を認めてあげられるように、子どもたちの内面的な広がり、純粋経験に気づけるように高めていきたい。

■ 事前にあった読み合わせで、すでに読んでいた題材であったが、読むたびに毎回気になるポイントがあったり、解釈が異なったりするので討論の内容が新鮮でおもしろいと感じました。

講演会

演題　『　住むことの哲学(3)　～西谷啓治の禅詩解釈をもとに～　』

講師　京都工芸繊維大学大学院　教授　秋富 克哉　先生

【講演を聴かれた先生方の感想】

■ 今回初めて「哲学」というものを学ばせていただき、そのまとめとして私たちに生活の基本である「住む」という点に注目して秋富先生にご講演いただきました。私にはかなり難しい内容で理解できない部分もありましたが、西田の教えを受け、西谷の考え方がより深く学べた気がします。

■ 今回の講演中で「伝統の枠を破ること」という言葉が印章に残りました。今までやってきたことから新しいことをするのではなく、伝統を生かしながら次のことにつなげていく。これは学校にもあてはまることだと感じました。今まで行ってきたことのよいことを生かしながら次のことにつなげていくことができたらよいと感じました。

■ 西田と西谷の出会いが人間と人間の出会いであり、レベルは違っても教師と子どもの出会いも人間と人間の出会いでありたいと感じました。自然と社会の関係について人間中心でなく、自然に住むということの大切さをこれからもますます考えていきたいです。

■「禅の道は・・・誰がいつの時代にどこで歩いてもみな同じ道を歩いている、と言えるところがある。しかしまた他方から見れば、一人一人の人間が或るところで歩いた道は、一つとして同じものはなく、限りない多様性を示しているとも言える」という言葉がとても印象に残りました。生徒に対しても同じで同じことを皆しているように見えても一人一人いろいろな思い、がんばりでやっていることに目を向けていかなければならないと改めて思いました。

【閉講式から】小澤　徳夫　上伊那教育会副会長挨拶

外の熱気同様に、今年もまた夏期講習会が熱い語らいのうちに終えることができますことを大変ありがたく思います。

哲学のもつ難解というイメージもあり、自ら求めて哲学の書を読む機会はそう多くはないと思います。こうした研修の場に参加したからこそ、本研修の目的である「自己を見つめ、自己に問い、考えを深め、自己を磨く」ことができた２日間だったと思います。

哲学のもつ難解というイメージもあり、自ら求めて哲学の書を読む機会はそう多くはないと思います。こうした研修の場に参加したからこそ、本研修の目的である「自己を見つめ、自己に問い、考えを深め、自己を磨く」ことができた２日間だったと思います。

新学習指導要領で大事にされている「資質・能力」の一つに、「学びに向かう力、人間性等を涵養すること」があります。また、「教師は常に学び続けなければならない」と言われます。私たちはこの２日間で、大いに学び、教師としていかに子どもの前に立つか、教師としての有り様、人間性について考えることができました。

熱く語る姿に、上伊那教育会が大切にしている理念、「はじめに子どもありき」「限りなき土着性の追求」「たゆまぬ教師の研鑽」の具体を見ることができたこともありがたいことでありました。

ここに至るまで、読み合わせのレポートに沿って、文書による丁寧なご指導をいただき、そして昨日・今日と直接ご指導、ご講演を賜りました秋富克哉先生、並びにこれまで４回にわたり事前の読み合わせで熱いご指導をいただき、そして昨日・今日と、常に哲学と日々の実践とを関係づけたご指導をいただきました唐澤正吉先生に心より感謝申し上げます。おかげさまで、「哲学をする」ことを味わうことができました。

お二人の先生におかれましては、これからもますますご健康でご活躍されますことをお祈り申し上げますと共に、上伊那の教職員に対して、今後ともご指導を賜りますことをお願い申し上げます。

また、今日に至るまでの周到な準備と学習を重ね、このように充実した夏期講習会にしていただきました運営委員、哲学研修委員の皆さん、司会者・レポーター・記録者の皆さん、二日間長時間にわたり熱心に語っていただきましたご参会の皆さん、また講演会に足をお運びいただきました地域の皆様に心より感謝申し上げ、閉講のあいさつとさせていただきます。